

目次

■ 平成15年度活動報告	1
■ 第22回学術大会抄録	
1. 19世紀英国国教会の動向とナイチンゲール	平尾真智子 …… 2
2. 近代看護の創設と大関和	上坂良子 …… 3
3. 横浜山手外人墓地に眠る十人の外国人医師達	正山 堯 …… 4
■ 日本医史学会9月例会・神奈川県会第23回学術大会合同会	
1. 西南戦役と神奈川県下の官修墓地	中西淳朗／松本龍二 …… 9
2. 漢方製剤の医史学的補遺	菊谷豊彦 …… 11
3. コレラに対する禁忌食品の時代的変遷	佐分利保雄 …… 12
4. 「ペスト残影」に書残したこと	滝上 正 …… 13
<hr/>	
■ 平成15年度一般会計決算	14
■ 平成16年度一般会計予算	15

平成 15 年度活動報告(平成 15 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日)

●大会

1. 第 22 回学術大会抄録

(3 月 15 日／於：横浜市健康福祉総合センター)

【一般口演】 座長 衣笠 昭

- | | |
|--------------------------|-------|
| 1. 19 世紀英国国教会の動向とナイチンゲール | 平尾真智子 |
| 2. 近代看護の創設と大関和 | 上坂良子 |

【特別講演】 座長 河野 清

- | | |
|-------------------------|------|
| 1. 横浜山手外人墓地に眠る十人の外国人医師達 | 正山 堯 |
|-------------------------|------|

2. 日本医史学会 9 月例会・神奈川地方会第 23 回学術大会合同会

(9 月 27 日／於：鶴見大学歯学部 3 号館)

【一般口演】 座長 関根 透

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1. 西南戦役と神奈川県下の官修墓地 | 中西淳朗／松本龍二 |
| 2. 漢方製剤の医史的補遺 | 菊谷豊彦 |
| 3. コレラに対する禁忌食品の時代的変遷 | 佐分利保雄 |
| 4. 「ベスト残影」に書残したこと | 滝上 正 |

●幹事会

2 月 14 日、9 月 5 日に開き、学術大会等について協議した。

●その他

家本誠一氏が平成 15 年 8 月 25 日、第 17 回間中賞を受賞された。

「神奈川地方会だより」第 12 号を作製し会員に配布した。

第22回学術大会抄録

《一般口演》

1. 19世紀英国国教会の動向とナイチンゲール

帝京平成短期大学 平尾真智子

近代的な看護改革が19世紀のイギリスでナイチンゲールによって世界に先駆けて行われた背景には、当時のイギリスの宗教の動向が大きく関係している。

クリミア戦争(1853～56)が起こった19世紀の半ばは、イギリス国内では1830年から1850年にかけて国教会内部でいわゆる「オックスフォード運動」(国教会改新運動)が行われた直後にあたり、国内での複雑な宗教的な動きの影響を受けていた。

フランス軍のようにカトリックの修道女による組織的な看護を持たなかったイギリス軍にとって、兵士の看護を誰(どの宗派)が行うかは大問題だった。クリミアに派遣される看護団は国教会派のナイチンゲールを監督に、カトリックの修道女10名、国教会の修道女8名、聖ヨハネの家(国教会派)の看護婦6名、宗教によらない病院看護婦14名の計38名で構成された。戦場ではこれら看護婦による患者の改宗活動に関する問題がナイチンゲールを最も悩ませた。

ナイチンゲール自身は国教会にも両親の信仰するユニテリアンにも収まりきらない、神秘主義の影響を受けた独自の宗教観をもっていた。一時期カトリックへの改宗も考えたナイチンゲールは最終的には国教会にとどまるが、自己の宗教観を表した『思索への示唆』(1860)を執筆した。

ナイチンゲールはクリミアから帰国後、国教会派のセント・トマス病院に近代的なナイチンゲール学校(1860)を創設するが、それは運営の基盤も訓練の内容も見習生の選別に際しても、どの宗派にもよらない非宗教的な学校であった。

2. 近代看護の創設と大関和

和歌山県立医科大学看護短期大学部 上坂 良子

明治政府は、漢方が主流であった医学教育に西洋医学を導入したが、看護者養成の考えはなかった。洋医による官公私立病院が漸増し、病人の世話をする看病人が存在するようになった。この中には優れた人材もいたが看護婦養成の機運は起こらなかった。看護婦の誕生に関わる先行研究によると、高木兼寛(慈恵)や新島襄(同志社)らが看護婦の教育を受けた外人宣教師らを海外から招いたことに始まる。その教育はナイチンゲール方式で行われ、日本の近代看護の出発点とされている。教育を受けたのは、少数の看護婦であり、Trained Nurseと呼ばれた。先魁は有志共立東京病院看護婦教育所(慈恵)、京都看護婦学校(同志社)、桜井女学校附属看護婦養成所で、その後、帝大、日本赤十字社と続く。

大関和(1858～1932)は女学院の前身、桜井女学校附属看護婦養成所の1期生として1888(明治21)年に卒業した。その後、基督教婦人矯風会に所属し、女子学院の校長であり基督教婦人矯風会会頭であった矢島楫子(1834～1925)の元で、女性の地位向上をめざす活動を学び、行動を共にした。生来の能力を開花させた大関は、看護婦の教育や派出看護実践を率先躬行し、基督教婦人矯風会活動の一環では伝染病予防への衛生普及、看護法など啓蒙活動を行った。

「派出看護」という看護形態はこのTrained Nursesによって生み出された職業である。当時、看護は法規制がなく、人間の健康問題に関わるのに倫理的概念が表明されていなかった。大関はその主張を明確にし、質を守る行動を起こした。看護は社会に果たす役割があり、質を保持するために自らを磨き、看護の新技术を習得研鑽し、自立して医師と共に人々の健康回復・増進に専心するものと主張した。この活動は看護界の粛清をも促し法整備に影響を与えた。大関は『派出看護婦心得』『実地看護法』を著し、実学の看護思想を集大成した。

《特別講演》

『横浜山手外人墓地に眠る10人の外国人医師達』

鎌倉市医師会理事 正山 堯

日本の開国と同時に世界各国から多くの外国人が来日した。その表玄関となったのが横浜港であった。作家大仏次郎が明治初頭の横浜を舞台にした小説「霧笛」の文中に「海の上の空は高くて広い。港には波があった。栈橋の踏板もしぶきにぬれている。絶えず、橋ぐひにあたる風波の音が足の下で陰気にごぼごぼ鳴っている。……」との一節がある。日本近代の歴史は将に、人も物も、武器や機械も、科学や芸術、思想や制度、そして、コレラ、ペスト、結核、梅毒、天然痘などの疾患も、日本近代化に関わる殆んどあらゆるものが、ごぼごぼと鳴る栈橋の踏板からもたらされたと言っても過言ではない。当時来日した外国人の中には、日本の近代化を進める目的で、日本政府が招聘したいわゆる“お雇い外国人”の中には医師を始め、医学教育に関連した外国人も含まれていた。ヘボン、シモンズ、ジエンキンズ、シッタール、ウイルス、シーボルト、ニュートン等の後世に名を残した医師達は、横浜を起点として江戸、長崎、北海道等の日本各地に赴き、我が国の医学発展のために尽した功績は計り知れない。しかし、彼等の殆どはその役目を終えると、勝れた業績と成果を残して帰国した。中には、エルドリッジやホイラーのように日本に永住し日本の土となった医師達も少なくない。今回の講演の内容は演題の通り横浜を舞台に活躍し、同地で歿し、横浜山手外人墓地に埋葬された10人の医師達にスポットを当て、どのような医師達が同墓地に眠っているのか、当時は高名であったが、今では全く忘れ去られている医師達にも日の目を当てるのが主旨であって、各人の詳しい行績を紹介するのが目的ではない。それでは、山手外国人墓地を散策するつもりで、同墓地に永遠の眠りについでいる医師達の墓碑を訪ねてみることにする。

横浜山手外人墓地は別図の如く全22区域に区分されている。墓地正門より入り右回りで10人の医師達の墓碑を訪ねてみる。

1) GEERTS, A・J・C (1843 ~ 1883) 9 (A)

ヘールツは医師ではないが、我が国の薬局方の制定や衛生試験場の設立に尽した功績は大きい。明治10年(1877)に来日した。墓碑はオランダ語で刻まれているが、石碑の文字が摩滅して読めない。1976年神奈川県薬剤師会は、ヘールツの命日8月30

日に、オランダ語と日本語で刻まれた顕影碑を建立させたが、最近カラスの落糞によってよごされ文字も腐蝕されている。ヘールツは日本政府より勲4等旭日小綬章が贈られた。きわ夫人ともども眠っている。

2) CLEMENT, C・M^c (1836 ~ 1871) 11 (B)

クレメント医師についてその足跡は今のところ不明である。墓碑銘にはこの墓が二人の医者兄弟によって建てられ、クレメントがイギリスの外科医であったことが記されている。クレメントは1871年8月17日に35歳の若さで亡くなっている。墓碑銘の最後の“安らかに眠れ”は“REQUISCAL IN PACE”とラテン語で刻まれているのがいかにも洒落ている。普通は<RIP> “Rest in Peace”である。

3) PURCEL, T・A (1841 ~ 1877) 20 (C)

T・Aパーセルは1870年に駐日イギリス海軍第10連隊第1大隊付き外科医として来日し、日本国政府に雇用され工部省鉄道医となった。

それ故パーセルの墓の前には、東日本旅客鉄道株式会社によって平成3年10月14日付けで、“準鉄道記念物・セオボールド・パーセルの墓と書かれた石碑が建てられている。パーセルは36歳の若さで病死したが、パーセルの墓に並んでパーセルより5年先に亡くなった夫人の墓もある。墓碑銘は長文だがパーセルが日本帝国の一般病院の Principal medical officer であったと記されている。

4) DALLISTON, J・J・R (1821 ~ 1875) 21 (D)

ダリストンは慶応2年(1866)に来日したイギリスの外科医である。第5代?横浜ゼネラル・ホスピタル(以後G・H)の院長として活躍した。“J・Pヘラルド”の編集者J・R・ブラックは、自ら創刊した隔週刊誌「ファー・イースト」の中にダリストンに関する記事が載っている。記事によると、陸軍大尉ギルフィランが落馬して上腕骨を脱臼し、その手術をダリストンが行ったが、クロロホルム麻酔中にギルフィランは急死した。ダリストンは“故意の殺人”の嫌疑のもとにイギリス領事より有罪の判決を受けるが、居留民こぞってこの判決に異議を唱え、遠く上海からの同僚の応援を得て、最高裁判所長官E・ホーンビー卿の判決により、ダリストンは晴れて無罪放免となったとの記事である。ダリストンの墓は21区に在り、元町に通じる宮脇坂から垣間見ることが出来る。墓碑銘には長い間Central Hospitalの院長を勤めたと記され、最後に、“Deeply Recreated many Friends”と刻かれている。この一文からもダリストンが多くの人達に愛され親しまれた医師であったことが伺える。因に手術中に亡くなったギルフィランの墓はダリストンの墓碑の近くに今も残されている。

5) MEYER, A・DE (1833 ~ 1869) 22 (E)

メイエルは1865年来日したオランダ海軍軍医である。同僚の医師デ・ヨングと共同で山手82番地(後の山手G・H)にオランダ海軍病院が設立された時の首席医師としてメイエルが迎えられている。メイエルは36歳の若さで急死するが、死の直前まで横浜G・Hの医療報告を2回にわたり発表したと、当時横浜に滞在していた医師ニュートンは述べている。メイエルの墓は22区にあるが、この墓域は最も古く、メイエルの墓碑近くには生麦事件や幕末動乱期に攘夷の刃で殺害された外国人の墓が点在し、この墓域に立つと死者の慟哭の叫びが地底からこだましてくるようである。メイエルの墓碑には、彼がロッテルダムで生れ1869年8月7日に横浜で死亡と記されている。

6) MASSAIS・E (1836～1877) 16(F)

明治3年(1870)に来日したフランスの医師である。A・Fボードウインの後任として、大学東校医学教師に赴任するが何故か学生達の反感を買い在任2ヶ月で退任している。横浜ではダリストンの死後エルドリッジと共に山手G・Hに勤務したが、マッセは当時大流行したコレラに罹り、41歳で不帰の客となった。

マッセは人望が厚く、葬儀にはエルドリッジ、シモンズ、ホイラー等の医師達が参列して別れを惜しんだと当時の新聞は伝えている。マッセの墓は寝棺型の立派なもので、墓碑銘には旧陸軍医師で山手G・Hの医師を勤めたフランス語で刻まれている。

7) WHEELER・E (1840～1923) 16(G)

西洋の赤髭と呼ばれたホイラーは1870年にイギリス海軍軍医として来日した。1876年に横浜G・Hの医師となり、1885年からは同病院の院長を勤めた。ホイラーは外国人居留地の名士でありスポーツマンでもあった。挿し絵はC・ワグマンのジャパン・パンチに描かれたホイラーのテニス姿である。ワグマンは日本で始めて高橋由一や五姓田義松に西洋油絵を教えた人である。ワグマンの墓はホイラーやマッセと同じ6区域にある。ホイラーは1923年9月1日の関東大震災の時、自宅に戻る途中谷戸坂上で焼死した。82歳の高齢であった。墓碑銘の最後に”TILL THE DAY BREAKS”と刻まれている。ホイラーの生前の功績に対して、日本政府から勲3等瑞宝章が贈られた。



ホイラー (J. P., 1882. 10)

自宅に戻る途中谷戸坂上で焼死した。82歳の高齢であった。墓碑銘の最後に”TILL THE DAY BREAKS”と刻まれている。ホイラーの生前の功績に対して、日本政府から勲3等瑞宝章が贈られた。

8) TRIPLER, T・H (1846～1909) 14(H)

T・H・トリプラ医師について知る人は先ずいないと思われる。トリプラの足跡は不明であるが、1877年来日し、外国人居留地39番Aに住んでいたことはわかっている。

1891年2月14日号の「The Japan Weekly Mail」に、グランド・ホテル（現H・ニューグランド）デイキン兄弟商会の定期株主総会が行われた時、そのメンバーであったトリプラは、「ホテルの各ディレクターの報酬を250ドルにしてはどうか、……」などと発言している。この会の重要ポストに名を連ねていることから推して、トリプラは当時高名な医師であったようだ。墓碑にはニューヨークで生れ横浜で亡くなったと記され、最後に“LATE LIFE FEVER” “HE SLEEPS” とある。この文からもトリプラは、高潔且情熱な医師であったことが推察される。

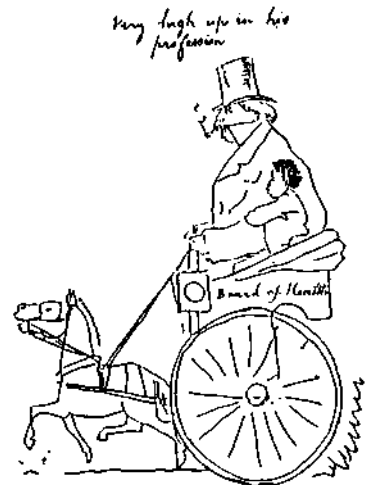
9) MÉCRE · A (1846 ~ 1917) 6 (I)

フランス人医師A・メクルは1880年に来日し、在日期间は37年の長期にわたっているにも拘らず、メクル医師を知る人は少ないと思われる。メクルは山手G・Hの6代目院長とされているが、これは明らかな誤りで、5代目院長ダリストンの死亡が1875年でメクルの来日が1880年故、この5年間の空白はエルドリッジとマッセが院長を兼ねていたのである。1891年2月14日付けの“Japan Weekly Mail”に横浜G・Hの総会で、Dr・Mécreに113ドルが支払われたとの記事が載っている。メクルが山手G・Hに在籍中には、ハイデン・ミショー・マンロー各医師と仕事をしていた。メクルの墓碑には、夫人と共にこの地に眠るとフランス語で刻まれている。

10) ELDRIDGE · S (1843 ~ 1901) 4 (J)

1871年日本政府からの招聘で来日し函館に着任し函館医学所教授を就任した。4年度に横浜に移り、ダリストン死後の山手G・Hの院長を勤めた。横浜富岡海岸の水質を調査し、同海岸の海水浴場として“適”マークを付けたのもエルドリッジである。また死体の火葬提唱者でもあり、自らも遺言通り茶毘に付された。エルドリッジがフリーメースンの一員であったことはあまり知られていない。墓碑銘は、S・エルドリッジ・1843年1月2日に生れ、1901年10月16日に死すとだけ簡単に記されている。エルドリッジの長年の医学への功績に対して、日本政府は勲3等瑞宝章を授けた。図はC・ワグマンが“ジャパン・パンチ”に載せたエルドリッジの挿絵である。馭者をそっちのけで自ら馬を操り往診に急ぐエルドリッジが描かれている。

キャプションには“very high in his profession”とあり、更に“Beard of health”つまり、パイプを啜めるのなら口髭よりあご髭の方が無難ではないのかとエ

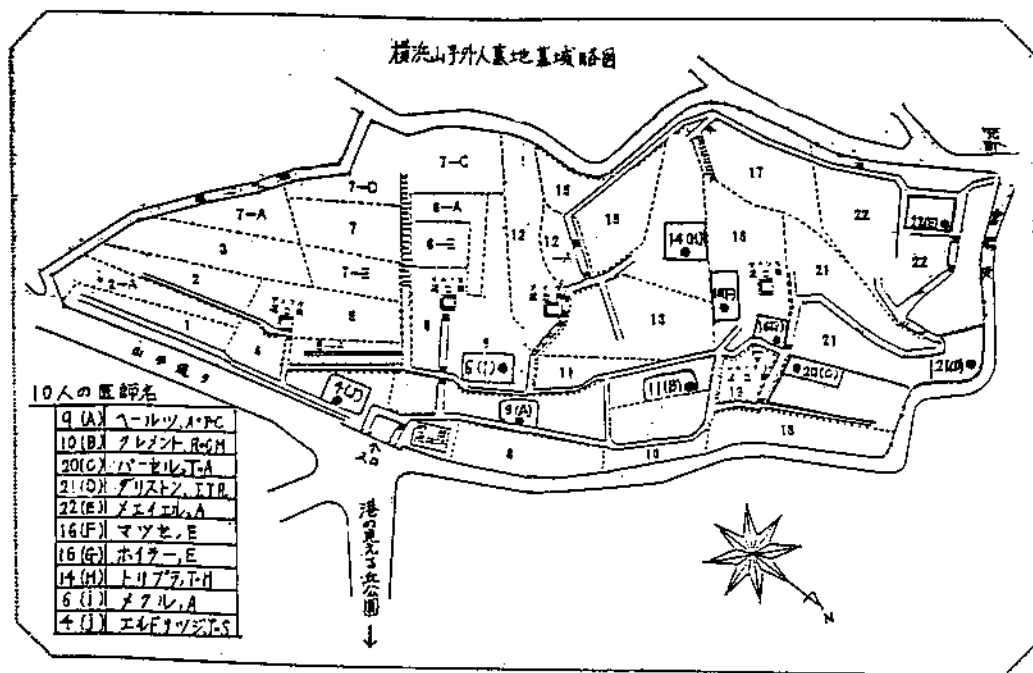


エルドリッジ
(J.P. 1877.3)

J.P. 1877.3

ルドリッジを擲擧っている。以上が異国の地に永遠に眠る10人の医師達である。百数十年の泥と埃を扱った墓石を水と刷毛で洗い落とし、刻まれた文字を白墨で埋めて、判読可能になった墓碑銘からは、銘文を作成した家族、或は友人達を通して死者の生前の人間像が浮かびあがってくる。そして何よりも今では訪れる人もなく忘れ去られた何人かの医師達にかすかな光を当てる事が出来たとすれば、死者の霊の慰みにもなるのだろうか。山手外国人墓地には医師の他あらゆる分野で日本近代化のために貢献した各国の人達も眠っている。横浜開港期の歴史の宝庫でもある外国人墓地を大切に保存し、掛け替えの無い貴重な歴史遺産として後世に伝えていかなければならない。外国人墓地の正門の石柱には、トーマス・グレイの詩が書かれている。

美人の栄華。富豪の驕者
 孰づれか無常の風に逢はざらん
 栄光の道 向う所は墳墓のみ



9月例会・第23回学術大会合同会抄録

《講演》

1. 西南戦役と神奈川県下の官修墓地

中西 淳朗 松本 龍二

西南戦役が終って125年以上が経過したが、官軍方の記録、なかんずく旧士族を中心とした臨時巡査を主力とする新撰旅団についての記録は誠に少ない。極言すれば、初戦より終戦までの一貫した召募巡査の従軍記録がないことが、新撰旅団の足跡を不透明にしている原因と考えられる。

横浜市西区久保山共葬墓地の第9区に、西南戦役で死没した巡査の墓が5基ある。地震や空襲で破損が激しく氏名の明確でない墓が3基あり、管理事務所でも不明と云っている。

神奈川県史料によると、県下では旧小田原藩士に向けて新撰旅団への召募が行なわれ、30名ほどの応募しかなく、農民、商人にも召募をすゝめてやっと90名が集まった。そこで明治10年5月末に51人を戦地に送りこんだと云われている。

その中で死亡したる者は5名で、出身地は県史料によれば横浜、八王子（当時は神奈川県）、三浦半島、足柄上・下郡となっている。

久保山官修墓地の5基の墓碑からの推定では、10月下旬に入ってから死亡と考えられた。

即ち、城山陥落は9月24日であるので、城山攻防戦による死亡ではない。多分、鹿児島引揚中、船内で腸管急性伝染病に罹患し、大阪臨時陸軍病院に入院したが、不幸にも死亡されたと考えられる。陸軍第2旅団付軍医の手塚良仙の経過（鹿児島市内で赤痢に罹患し、大阪へ送られて死亡）と同様の戦病死である。

当時の政府は、はじめての大きな内戦ということもあって、慰霊という行為を招魂社で行った。その対象者は、軍籍の有無を問わず戦地で銃弾、刀剣にて死亡した者に限った。

従って伝染病などの平病による死亡者の招魂社祭祀は行なわなかった。（明治31年9月の陸軍省告示で特旨をもって合祀となる）

明治10年頃は戸籍のはっきりしない者も多く、本籍地がわかっても遺骨の引取

り手のない戦病死者が多くいた。この様な状況であったので、政府が墓碑を造成し祭祀を実施する特別の墓地を、無籍に近い死者のため官修墓地と名づけて提供した。(昭和56年10月以降は祭祀を地方自治体が行うように法改訂された) 県下のその1が久保山共葬墓地第9区にあるのである。

共同演者の松本龍二は、平成14年、横浜市追浜地区の鉦切山にも官修墓地があることに気附いて探訪すると共に、文献の発掘に努めた。その結果、この墓地は新撰旅団の面々が、和歌浦丸と東海丸に分乗し帰還中、船内でコレラが発生し、10月10～15日頃に追浜についたことがわかった。両船は長浦湾口で停船を命ぜられ、浦郷村の箱崎に避病院が急造されコレラ患者を収容した。10月中旬以降は毎日数人づつ死亡し、11月には計48名の死亡者となった。当初、遺体を黒崎地区に埋葬したが、大正2年に海軍の用地として整地された折、追浜の鉦切トンネルの上に墓石をたて官修墓地とした。現在では地元の浦郷町内会が管理・祭祀を代行している。

この墓地には48基の墓石があり、警視局関係32名、うち新撰旅団30名。船舶従業員7名であった。また士族は25名、うち東北列藩同盟関係士族は8名であったが、福島県人は1人も見ない。また神奈川県では士族、平民各1名となっているが、県の方への報告はなかったと思われる。

久保山の方々には氏名が判然としないものがあると述べたが、追浜の方々は、昭和3年に発刊された田浦町誌にその名が記載されており、それにより現在までに2名の方の遺族が何十年振りに参拝に来られた由である。

なお、この地所内に北村包直(県立横須賀高女初代校長)撰文の顕彰碑がたっている。

2. 漢方製剤の医史学補遺

菊谷 豊彦

1973年(昭和2年)に「漢方医学の新研究」を上梓した中山忠直氏は「将来は漢方エキス剤の時代がくる」と予言したといわれている。

戦後、1947年(昭和22年)武田薬品工業(株)研究所の渡辺武、後藤実の両氏は日本薬学会近畿支部例会で「漢方方剤の煎出法に関する研究」、翌年には薬学会で第2報「漢薬類の精油含量について」1953年(昭和28年)には日本東洋医学会第4回総会で発表し、「漢方方剤の煎出法に関する研究」(第2報)と(第3報)を(日本東洋医学会誌4巻2号)原著としている。

この論文を基礎にして大阪の小太郎漢方製薬(株)などが漢方製剤を製造・発売するに至った。

すでに1947年(昭和22年)に武田薬品工業(株)は平胃散をエキス剤にした「マミール」を製造・発売したといわれる。

1950年(昭和25年)の日本東洋医学会有志が武田薬品工業(株)の技術により、必要な揮発分もとり入れた漢方エキス剤を20種作り、臨床効果の判定を呼掛けたが、反応はほとんどなかった。

当時エキス剤の開発にもっとも熱心であったのは小太郎漢方製薬(株)であった。

なお、1950年(昭和25年)3月には日本東洋医学会が発足し1954年(昭和29年)には東亜医学協会が再発足した。

小太郎漢方製薬(株)の漢方製剤が製造・発売されたのは昭和32年である。同社は同年、研究所、工場を整備し、桑野重昭氏を所長に迎えた。同氏は後に漢方煎液を抽出の後に減圧濃縮・乾燥する真空(減圧)泡沫乾燥法に成功した。

昭和32年当時の行政の承認書類は現存しないとされ、僅かに当時の適応症のみが残されている。また承認の基準も不明である。1962年(昭和37年)に当時の行政の承認書類はあるが、上記との関連は不明である。

1962年(昭和37年)と1963年(昭和38年)に医薬品製造承認指針が刊行され、漢方製剤の整備の道は進んで行く。

3. コレラに対する禁忌食品の時代的変遷

佐分利 保雄

コレラは文政5年(1822)に初めて日本に侵入した。人々はこれを三日コロリと呼んで恐れた。

当時の人々も、コレラは消化器伝染病と認識し、経口感染と考え、ある種の食物を特に恐れた。これらの食品を假りに禁忌食品と呼び、時代的に変遷した経過をたどって見た。

1822年、最初の流行では、山田椿庭が、酒、うなぎ、そば、糕(こう)、ねぎ、標、柿、とくにイワシ、鯛魚を禁忌とした。

1858年、第2回目の流行の時ポンペは、イワシ、サバ、マグロ、タコなどの魚類とカボチャ、トウキビ、キウリ、シマウリなどの野菜を禁じた。

1862年、第3回目の流行の時もポンペは長崎に居たので上記の食品が禁じられたであろう。

明治前半：ベルツは瓜類とくに眞瓜、西瓜を廃棄し、未熟な果物、野菜を禁じ、肉類をすゝめた。

明治12年(1879年)にはカニ、カンテン、トコロテン、ヒジキ、アラメなどの海草とナンキン、ナンバキビを禁じた。(明治17年、1884コッホがコレラ菌を発見)

明治後半、大正時代になると、魚類を恐れた。大正11～14年(1922-25)には16府県で、3ヶ月間漁業が禁止された。

昭和37年(1962)：台湾バナナを消却した。

昭和39年(1964)：習志野事件発生：渡航歴のない宿泊客がエルトールコレラにかゝり29時間後に死亡した。輸入紋甲イカが疑われたが、コレラ菌は検出されなかった。

昭和53年(1978)：池端結婚式場事件が発生、44人の患者、保菌者が出た。しかし食品からはコレラ菌が検出されなかった。

昭和55年(1980)、輸入食品から初めてコレラ菌が検出された。以後、昭和59年(1984)まで0～11件のコレラ菌陽性の食品が流入した。食品はエビ類が主で、輸入先はタイ、インド、フィリピン、台湾、インドネシアである。

コレラ菌が発見されておよそ100年経て、ようやく食品からコレラ菌が検出されるようになった。したがって、それ以前に禁忌食品とされたものは推量に過ぎず、恐らくコレラ予防には役立たなかったと考えられる。

4. 「ペスト残影」に書残したこと

滝上 正

- 1: ブリュエール父子三人が描いた「死の勝利」について。三人の細部のタッチは異なるが、基本構想は同じと思われる。凄まじい勢いで攻め込んでくる死人の大軍団（ペスト）、その前に打ちひしがれた王様、教皇そして名もない大衆、死を目前にして求める寸時の悦楽、そして遠景には荒涼たる死の世界が画かれている。
- 2: グローの画いた「ヤッファのペスト患者を見舞うボナパルト」について。画面中央のナポレオンは右手には手袋を着けているが、左手は素手のままペスト患者の右腋窩のブポーに触れている。彼はペストに戦く兵士たちをヤッファにある病舎に見舞い、平静を装って兵士を鼓舞した。
- 3: 検疫を英語ではQuarantineという。その語源になっている40という数は検疫期間の40日ということの外に西洋文化史、キリスト教史、さらには医学史の上でも特殊の意味を持っていた。
- 4: ペスト対策として殺された多数のネズミを憐れんで明治34年東京、広尾の祥雲寺境内に鼠塚が建てられた。建立に当たり寄せられた多額の寄付の背景には日本人のネズミに対する心情的な思いこみがあったのではないか。それについて見解を述べた。
- 5: ヨーロッパ中世の衛生状態は劣悪であり、それがペスト蔓延の根底にあった。ここでは個人の衛生状態を入浴とくに浴場の果たした医学的役割りや、住居、食事の面より検討した。浴場でバーダーなどにより行なわれた瀉血は重要な医療技術であって、瀉血の部位、日時などにも専門的知識が要求された。中世のとくに城壁内の一般住宅は採光、暖房、汚物処理の面で問題が多かった。

平成 15 年度日本医史学会神奈川地方会一般会計収支決算表

1. 収	入	-金	545,307 円
2. 支	出	-金	250,250 円
3. 残	額	-金	295,057 円



1. 収入の部

科 目	予算額	決算額	摘 要
繰越金	106,288	106,288	
会費収入	240,000	261,000	3,000 円× 87 名
神奈川医学会育成費	160,000	160,000	
第 22 回学術大会会費	10,000	11,000	500 円× 22 名
第 23 回学術大会会費	10,000	7,000	500 円× 14 名
雑収入	0	19	貯金利子
計	526,288	545,307	

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額	摘 要
第 22 回学術大会支出	46,600	46,600	特別講演講師謝礼 30,000 円 事務員謝礼 6,000 円× 1 名 5,000 円× 2 名 会場使用料 600 円
第 23 回学術大会支出	46,600	20,000	事務員謝礼 10,000 円× 1 名 5,000 円× 2 名
印刷費	200,000	84,000	地方会だより 150 部印刷
通信費	130,000	33,680	地方会だより・諸通知発送
幹事会費	50,000	31,500	2 回開催
文具費	30,000	2,110	
交際費	10,000	30,000	幹事会職員謝礼 10,000 円× 2 名 大会垂れ幕揮毫 10,000 円
払込手数料	6,000	2,360	
雑費	7,088	0	
計	526,288	250,250	

平成 15 年度日本医史学会神奈川地方会一般会計の決算につき、平成 16 年 2 月 15 日収入支出決算額に対し決算書及びそれに付随する証憑につき監査を施行するに相当と認めます。

監事 大島 智夫 
 監事 家本 誠一 

平成 16 年度日本医史学会神奈川地方会一般会計収支予算表

1. 収入の部 一金 715,057 円
2. 支出の部 一金 715,057 円

1. 収入の部

科 目	金 額	摘 要
繰越金	295,057	
会費収入	240,000	3,000 円× 80 名 約 80%
神奈川医学会育成費	160,000	
第 24 回学術大会会費	10,000	500 円× 20 名
第 25 回学術大会会費	10,000	500 円× 20 名
計	715,057	

2. 支出の部

科 目	金 額	摘 要
第 24 回学術大会費用	50,000	特別講演講師謝礼 30,000 円 職員謝礼 10,000 円× 1 名 5,000 円× 2 名
第 25 回学術大会費用	50,000	特別講演講師謝礼 30,000 円 職員謝礼 10,000 円× 1 名 5,000 円× 2 名
第 105 回日本医史学会総会賛助費	200,000	5 月 15・16 日開催
印刷費	200,000	地方会だより、名簿、諸通知印刷
通信費	50,000	地方会だより、名簿、諸通知発送
幹事会費	50,000	2 回開催予定
交際費	50,000	
文具費	20,000	封筒、通信用紙、ワープロリボンなど
払込手数料	7,000	
諸謝礼	30,000	幹事会職員謝礼、大会垂れ幕揮毫料など
雑費	8,057	臨時出張費など
計	715,057	

日本医史学会神奈川地方会役員

名誉会長	大滝 紀雄								
会 長	杉田 暉道								
幹 事 長									
幹 事	荒井 保男	金澤 司	衣笠 昭(会計)						
	河野 清	関根 透	坂本 玄子	佐分利保雄	滝上 正				
	中西 淳朗	深瀬 泰且	真柳 誠	山本 徳子	吉川 幸子				
監 事	家本 誠一	大島 智夫							[50音順]

[第5期:平成14年1月1日～平成16年12月31日]

日本医史学会神奈川地方会会則

第1条(名称)	本会は日本医史学会神奈川地方会という。
第2条(目的)	本会は医学の歴史を研究してその普及をはかるを目的とする。
第3条(事業)	本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。 1)総会 2)学術集会 3)その他前条の目的を達成するために必要な事業
第4条(入会)	本会の趣旨に賛同し、その目的達成に協力しようとする人は、会員の紹介を得て会員となることができる。
第5条(会費)	正会員は年会費3,000円を前納する。
第6条(役員)	本会は運営のためつぎの役員をおく。 会長1名、幹事長1名、幹事若干名(うち会計1名)、 監事2名。任期は3年とし、重任は妨げない。
第7条(名誉会長、顧問)	本会は名誉会長、顧問をおくことができる。
第8条(会計年度)	1月1日より12月31日をもって会計年度とする。なお本会の事務所は横浜市におく。
付 則	その会則は平成15年3月16日より発効する。